

過去約2年間に発行された書籍の中から時事的で話題性があり内容豊かなものを会員のご要望に応えながら編集委員会が選択して紹介いたします。

『日本の医療と介護—歴史と構造、そして改革の方向性』

池上直己 著 | 日本経済新聞出版社 2017、212pp.

日本は他の先進国に類を見ないスピードで人口の高齢化が進んでおり、現在の医療制度と介護制度が抱える課題を解決することが急務である。本書は、日本の医療・介護制度の成り立ち、仕組み、そして直面する課題とその対策について詳細に解説したものである。

日本の医療・介護制度に関する既存の書籍では、現行制度の概要(基本的な仕組み)の紹介、もしくは医療と介護のどちらかの制度の課題を詳述したものが多かった。本著者は医療・介護分野において日本を代表する研究者であり、これまで厚生労働行政の各種委員を多数歴任されている。本書では、現行の医療・介護制度のみならず、各制度のこれまでの歴史的経緯を詳述し、両制度の課題の本質を解明した上で必要となる制度改革案が具体的に提言されている。

概して若手研究者は制度の歴史的経緯に関する知識が少ないと思われるが、診療報酬や医療計画、介護保険といった各制度の歴史的経緯を踏まえることで、現行の医療・介護制度に対する理解はより深まる。また、両方の制度に関わる終末期医療・ケアの詳細について学習できるのも、本書の特色である。医療・介護制度の課題の本質がこの一冊に詳細かつわかりやすく解説されており、医療・介護政策に関心のある研究者(特に若手)には必読の書籍である。

評／『彦根論叢』編集委員／佐野洋史

『保育園問題—待機児童、保育士不足、建設反対運動』

前田正子 著 | 中央公論新社 2017、230pp.

現在、日本では少子化が進んでいる一方で、都市部での待機児童問題が深刻化している。待機児童対策として、政府は都市部において保育所の増設や幼稚園と保育所の認定こども園への移行などを進めているが、待機児童数は一向に減少する様子が見えない。本書は、待機児童増加の原因、保育士不足の原因、保育所建設反対運動の実態など、保育所を取り巻く諸問題について詳細に解説したものである。

社会保障に関する既存の書籍は、年金、医療、介護のいわゆる高齢者3福祉に関するものが多く、保育制度・政策に関する専門書は少ない。本著者は、保育・育児を含む社会福祉分野の研究者であり、横浜市で副市長として政策を立案・実行されてきた経験を持つ。横浜市がなぜ待機児童数を劇的に減らすことができたのか、保育所の建設反対運動にどのように対応したかなど、実務経験者として説得力のある問題解決策が提言されている。

女性の労働参加を促すための諸施策により近年の保育制度は複雑化しているが、本書の丁寧な解説により十分に理解することができる。また、保育士の処遇改善について、給与水準の低さだけではなく、保護者対応の困難さや保育士資格取得者の保育分野への就業率の低さなどの課題も詳細に解説されており、保育・育児政策に関心のある研究者には必読の書籍である。

評／『彦根論叢』編集委員／佐野洋史

